

(様式) 府立松原高等学校 「学校運営協議会」 報告書 (第2回)

日 時	平成30年11月16日 (金) 16:30~18:00			
出席者	運営協議会委員	職名等	学校事務局	校務分掌等
	房 本 晃	社会福祉法人 バオバブ福祉会理事	平 野 智 之	校長
	菊 地 栄 治	早稲田大学教授	島 岡 律 子	教頭
	吉 田 敦 彦	大阪府立大学教授	木 村 悠	首席
	野 崎 和 枝	本校PTA会長	伊 藤 あ ゆ	首席
			山 口 裕 子	人権教育主担
	教職員等			
	田ノ上 優光 (1学年) 岩崎 江津子 (2学年代表) 中川 泰輔 (2学年人担) 大橋 佑哉 (2学年) 南岡 靖之 (2学年) 眞杉 凌 (2学年) 深井 恵介 (3学年代表) 佐藤 智美 (3学年人担) 宮本 陸 (3学年)			
おもな テーマ	今年度の重点項目の進捗について 運営協議会委員からの感想・提言			
協議内容 の概略	<p>①平成31年度募集定員について (校長)</p> <p>②深い学びプロジェクト」について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・春、秋の2回の研究授業では、様々な先生が新たな観点でチャレンジしていた。分かりやすく教える、ということを超えて、より生徒が考える授業の工夫。1年生の「科学と人間生活」では、理科好きが増えるのでは。また、2年コミュ英Ⅱ周田教諭の研究授業では、英単語が覚えなければならないものでなく、知りたい単語になっていった。(深井教諭) ・個人の中だけで完結しない工夫。ペアで作問・解答を実施すると、生徒が「先生、これ合ってる？」と訊く回数が増えた。間違いはあるが、正解かどうかの判断も生徒にさせたい。(眞杉教諭) <p>③「高等学校における通級による指導」について (伊藤首席)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・周囲を巻き込んだ取り組みをとおして、対象者だけでなく他の生徒にも効果があった。関わりたいという思いをどうすれば実現できるか。(大橋教諭) <p>④協議委員からのご意見、提言</p>			
提言内容・改善 方策	<ul style="list-style-type: none"> ・作問法はすでにあったが、このシンプルさで協働学習ができるのか、驚き。教員と生徒の人間関係も大切。できる/できない、は絶えず関係性の中で確かめられていく。 ・アクティブラーニングを他校のものも見ているが、答えを学ぶプロセスを見せているだけのものが多い。社会が、「強い個」を求めている中、弱いままでも一緒に生きていこうとする松高の学び。数学ができるようになる、でなくて人に訊けるようになることがゴールの授業だった。答えは宙ぶらりんでよい。 ・「多くの人が求めること」をできる人が増えるより「やらない」という人とも一緒に生きていける社会のほうが、楽。 ・福祉的支援との違いが明確で、教育の力を感じた。できなさ、に対してできないままでも生きていけるようにしていく支援。 ・通級対象生徒の「友人にこう言いたい」という言葉に対する周囲の反応が大切。周り子も一皮むける、それがないと一方通行。もうワンストローク、返してみても。 ・生徒が楽しそうにしている姿が目につく。先生が楽しそうにしている。楽しい授業は生徒をひきつける。 			